松平定信編纂『古画類聚』所収の《古画舞楽図》についての一考察

古谷美也子（筑波大学）

江戸時代後期に松平定信（1758-1829）によって編纂された『古画類聚』には二つの《古画舞楽図》が所収されているが、そのうち後出の舞楽図には室町時代後期から継承されてきた舞楽図粉本である可能性がみられる。本発表の目的は、この《古画舞楽図》について画面に描かれた曲目ごとの舞人の図様と松平定信周辺の状況から検討を行い、その原本の成立時期について一つの提案を行うことである。

『古画類聚』は、奈良時代以降の絵巻や肖像画などの古画から主題別に図を取り出して分類し、38巻の巻子にまとめたもので、寛政9年（1797）から文化年間（1804-18）中頃に完成したとみられている。「人形服章十一」巻には舞楽と管絃に関する11図が集められているが、そのうちの1図である《古画舞楽図》には、室町時代中期までの舞楽図には見られない図様が含まれている。またこの図とほぼ同じ舞楽図が、天保9年（1838）に幕府奥絵師である狩野養信（1796-1846）によって模写されている。この二つの舞楽図についてはこれまで、室町時代の様相を表すと述べられながらも、具体的な成立時期についての検討は明確に行われていない。

舞楽図は平安時代以降、やまと絵の技法によって鑑賞のためだけではなく記録や継承を目的とすると思われる作例がいくつか残されており、室町時代中期には主に土佐派の絵師によって制作されていた。だがその後の江戸時代前半期には狩野派の絵師によって、金地に多数の舞人を曲目ごとに並べた図譜的な舞楽図屏風が流布した。従来言われているように、このような画風の変化は室町時代後期から江戸時代初期にかけて舞楽図制作に関連する転換期があったことを想像させる。また狩野派による舞楽図屏風の成立以前に、土佐派による舞楽図屏風がすでに成立していた可能性も指摘されている。

このような背景から発表者は、《古画舞楽図》が狩野派による舞楽図屏風の成立以前に存在していた土佐派による舞楽図粉本であり、狩野養信によって模写される以前に『古画類聚』に収載されていることから、現時点においての初出ではないかと仮説を立てて検討を行った。画面に描かれた楽人と舞人19人のうち、「採桑老」の姿は室町時代中期までの舞楽図には見られないが江戸時代以降の舞楽図には見られるものであり、「納蘇利」は土佐光茂による《桑実寺縁起絵巻》に描かれた姿と共通する。また編纂者松平定信は、長年古楽研究を行った父田安宗武の影響から、楽書や典籍を考証して『楽典』の編纂を行うなど舞楽の故実についての造詣が深かった。さらに江戸時代後期には、儒学者や国学者を中心に室町時代以前の舞楽図粉本が流布するなど、故実としての舞楽が研究された状況も見られた。

以上のことより、発表者は『古画類聚』所収の《古画舞楽図》は室町時代後期に、土佐派によって作られた舞楽図粉本であると結論付けた。